The Bukkyo kikaku News Letter
仏教企画通信
第81号
発行日　令和7年9月1日
発行所　有限会社 仏教企画
〒252-0016
神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5
Tel：042-703-8641 / Fax：042-782-5117
発行人　藤木隆宣
編集人　塚越雅之
Email　fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教伝来と蕃神としての受容

日本の古代政権に仏教が伝えられたのは、元興寺文書によれば五三八年のことであった。このとき仏教導入に積極的な崇仏派と、反対する排仏派の対立が生じたとされている。といってもはじめは百済の聖明王からもたらされた経典と仏像を、仏教として認識してはいなかった。仏を蕃神（ばんしん）と呼んでいる。蕃神とは外国の神のことである。排仏派の論拠は、日本には日本の神がいるのに外国の神を入れたのでは、日本の神が怒り、よくないことが起こるというものだったらしい。

この頃の古代政権は豪族の連合政権でその上に天皇が乗るというかたちだったが、豪族のなかでも崇仏派の蘇我氏が力をもっていた。こうして古代政権は仏教導入に動くようになる。この動きを「日本に公式仏教がもたらされた」と記されることが多いが、それは正式な仏教が入ってきたということではない。インドで生まれた仏教が中国で漢語に翻訳され、この中国語の仏教が朝鮮をへて日本にもたらされたのである。だからこの仏教は、中国風に再創造された仏教だった。

中国思想と儒教の国家観

中国思想の基盤には儒教がある。儒教がいつ生まれたのかは不明なのだが、儒教を成文化した人として孔子がいる。この孔子の文の解釈をめぐって、たとえば朱熹の解釈に従うと朱子学、王陽明の解釈に従うと陽明学などというように、いくつかの潮流が生まれていく。この儒教の特徴のひとつに、国家がなければ社会も民の安寧もありえないという考え方がある。社会のあり方としては天命を受けた王が国を支配し、その下に臣、さらにその下に民がいる。これが社会をつくるための絶対的な基盤であり、臣や民は国王に忠誠を尽くし、国王は徳のある支配をする。徳のある支配とは、慈しむように支配するということなのだけれど、それが国王の徳命だとされた。国王が徳を失ったときには王への天命が降りなくなり、このときは天命を回復する、つまり徳のある支配を回復するために臣は革命を起こしてもよいとされた。この革命を易姓革命というけれど、天命、使命、革命などはもともとは儒教からきた言葉である。

国家を守る宗教としての仏教

このような考え方の広がる中国に仏教経典が入ってきた。その結果一部の経典は、儒教と融合したような内容をもつようになる。仏教は国家を護る法であり、さらには仏教のもつ呪術的力で国家や国王を守護するというような仏教が生まれ、ゆえにそれは国王の庇護を受けることもあった。この仏教が朝鮮の新羅や百済などに伝わり、さらに日本に伝えられた。だからこの仏教は百済から日本の政権に公式に伝えられたというだけで、正統な仏教が伝播されたということではない。はっきり言ってしまえば、中国で改ざんされた仏教が入ってきたのである。そして、そういう仏教であるがゆえに、日本の古代政権にも歓迎された。

渡来人と民間信仰の融合

前記したように、百済から伝えられた当初は、仏は蕃神としてとらえられていた。だがさほど時間をおくことなく、仏は神とは違うことが認識されていく。さらに五〇〇年代、六〇〇年代の日本には多くの渡来人たちが暮らしていて、その人たちも、それぞれの国で暮らしていた時代に身につけた信仰をもってきたはずである。そのことについては、はっきりした記録が残っているわけではないが、この時代に朝鮮や中国から渡ってきた人を介して、おそらく民間ルートでの儒教、道教、仏教の伝播があったと思われる。さらに民間に広がった仏教は、道教や日本の自然信仰などとも習合しながら、民衆仏教の世界をつくっていった。

死後を担う仏、現世の神

ところで、神と仏の違いが認識されるようになると、日本ではたちまち仏が上位、神が下位とでもいうようなとらえ方が広がっていくことになった。奈良時代から平安時代初期にかけての民間説話集である『日本霊異記』などを読むと、仏の世界をうらやむ神が登場したりする。

このようなことがなぜ起きたのかというと、生の世界では神に頼ることができるが、死後は神ではどうにもならないというとらえ方が、人々のなかに生じたからであった。困ったときの神頼みではないが、生きているあいだは神が支えることができても、生と死にまたがる世界を支えてくれるのは仏だという認識が都周辺の人々に広がったのである。仏は生の世界も、死後の世界も支えてくれる。人々は仏教を介して、死後の世界をみいだしたといってもよい。

だが土着の神、すなわち産土神や水神といった自然の神にとっては、それはどうでもよいことであった。自然の神々が人々の生きる世界を支えている。ともに仏の世界が生死を超えた世界を支えている。それで別に問題はないからである。

天津神の危機と本地垂迹説の登場

ところが天津神の世界、すなわちイザナギ、イザナミからはじまりアマテラスやニニギノミコトへと連なる「日本国の神」にとっては、これはゆゆしき問題だった。仏教の仏よりも日本をつくった神が下だというのでは、日本神話の骨格が崩れてしまう。ゆえにこの問題を解決するには、新しい論理の立て方が必要になった。

こうして生まれてきたのが本地垂迹説である。それは、仏教の仏が日本では神として生まれたという説であった。たとえば伊勢に祀られているアマテラスは、はじめは観音菩薩の化身とされた。後に大日如来に変更され、大日如来が日本ではアマテラスとして現れたとされている。

他方で次のような説も生まれた。それは、アマテラスは太陽がさす世界のいわば大王である。それに対して大国主命は幽冥界の大王であり、両神が相まって生と死の世界を支えるという説である。だがこのふたつの説は、死後の世界も神が関わるということではあっても、生死を超えた存在の世界は提示し得ていない。

悟りによる死の超越と仏教の論理

仏教は死後の世界を約束している信仰ではない。悟りを

神と仏のあいだで
日本人の信仰と死生観の源流をたどる
内山節［哲学者］

開くことによって苦から解放される、すなわち永遠の楽を得ることを目指している。生に執着し、死に執着しているかぎり、その執着がさまざまな苦悩を生む。何ものにも執着する必要のない世界こそが悟りの世界であり、だとすればこの世界における存在は、生も死も超越する。とともに仏教は、私たちが仏に救済される対象ではなく、私たち自身が仏になることによって悟りの世界に往くことができるとした。この道筋を示したところに仏教があり、とすると神が死後をも支えるとしただけでは、仏の世界と並ぶことはできないのである。

若者の「小文字革命」で新時代

経済の不透明さと組織の変質を背景に、若者は「大文字の革命」ではなく、自らの足元から始まる「小文字の革命」へと向かう。哲学者・内山節とデザインコンサルタント・岸本吉生が、いま若者たちの間で何が起きているかを語り合う。

内山節氏（哲学者）／岸本吉生氏（デザインコンサルタント）
聞き手：島田一（金融ファクシミリ新聞編集長）

※文中敬称略

アマテラス神格化と民衆の関心の差

島田　乱暴な言い方をすれば、「日本の神」は仏教の前で苦戦したのである。だから江戸時代に入ると、日本人はみなアマテラスの子孫だという説も生まれ、いわば日本人共通の先祖神にすることによって、アマテラスに特別な地位を与えようともした。これなら死後など関係なく、日本人がみな敬わなくてはいけない神にすることができる。

　だが、すでに述べたように、普通の民衆の世界では、この問題に苦労する必要はなかった。

群馬の村での死生観との出会い

内山　いまでは私の村の家がある群馬県上野村に行きはじめた頃、驚かされたことがあった。それは村人の会話のなかで、死がタブー視されていないことだった。たとえばある日、ときどき訪ねたりしていた家の高齢のご主人が、体調を悪くして寝ているという話を聞いた。私は見舞いに行き、玄関に出てきた、やはり高齢の奥さんと立ち話になった。奥さんは「よく来てくれたねえ」といいながら私を奥に通した。部屋でご主人が寝ていた。奥さんが「内山さんが見舞いに来てくれたよ」というと、ご主人は目を開けて「忙しいのに悪いねえ」といっていた。案外元気そうだ、と私は思った。と、奥さんがいった。「この人もソロソロだよ」。病気になった人を前にして、東京ならこんな会話は絶対にしない。私はどう対応したらよいのかわからなくて困った。ところがご主人は「わしもソロソロだよ」といってニコニコしている。

　それは、共同体とともに生きた人々の精神を表していた。共同体とともに生き、共同体とともに死ぬ。それが自然のことなのである。これまでも数多くの先輩たちが旅立っていった。この旅だった人たちのなかに加わる。ただそれだけのことであり、共同体は生の世界にも死の世界にも成立しているのである。

神仏習合の民衆的世界観

　この世界のなかに自分たちを支えている神や仏がいる。そしていつの日か自分も、この神や仏の一員になっていく。ここでは神と仏を分ける必要もない神仏習合の世界が成立している。共同体とともに生きた民衆の世界では、ときにそれを神と呼び、ときにそれに仏を感じて手を合わせる世界が展開していた。

内山節（うちやま・たかし）
哲学者。一九七〇年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』（全15巻、農文協）『半市場経済――成長だけでない「共創社会」の時代』（角川新書）他多数。

目的を持ってキャリアを選ぶ若者たち

島田　岸本さんは、金融ファクシミリ新聞連載「ホモデウスと日本」の執筆を通してこれからの日本人の生き方を模索してきた。この度、連載を電子書籍としてまとめた。

岸本　経済産業省を定年退職し、限界集落のある市町村で貢献する人たちのために働くことを決心した。輪島塗・播州織など地場産業、限界集落の中高生向けの「人生の目的を見いだすキャリア教育」、地域のために起業する人のビジネスデザインの3つに取り組んでいる。全国各地の農山漁村で、今そこにある組織や慣行を乗り越えて、地域のために夢や理想を実現しようとする多くの人に出会う。私自身そのおかげで自分の残された人生の目的を意識するようになった。中高生のあいだに人生の目的を見いだす人はこれから増えていくだろうか。

内山　私は一九七〇年ごろから東京と群馬県・上野村で二重生活をしている。上野村の人口約1200人のうち4分の1程度が移住者だ。都会から上野村に移住すると収入は半減で済めば良い方だが、移住者は増加し続けている。しかも皆、「遊びたい」ではなく、「自然や地域の役に立つ仕事をしたい」と希望してやってくる。また、私は年1回程度、北海道大学農学部で講演をするが、北大では将来畜産に携わりたい学生が全国から集まり、学生時代からインターンシップに参加したり地域でネットワークを組んだりしている。私が若いころは「こんな社会じゃダメだ」と思っている人たちは都市部で吠えていたが、今の若者はなんとかなりそうな可能性のある場所に移動しており、行動力がすごい。最近は世の中を良くしているのか悪くしているのか分からないような仕事が多いから、本当に誰かの役に立つ仕事を探しているのではないか。

岸本　今の若い人たちは、組織のなかの地位に甘んじることなく、自らの毎日が何を引き起こすかをしっかりと見ているという印象がある。スポーツや文化で活躍する方のインタビューを見ると、自分が引き起こしたことから逃げないシリアスさを感じる。SNSを通じて何をやっているかを日々分かり合う経験が共感性と自主性を培うのだろうか。

「見えない」前近代、「見える」と信じられてきた現代日本

内山　私は東京出身で、小学校低学年の時に男の子同士で将来の夢の話をすると、人気があったのは電車の運転手や警察官、学校の先生だった。ところが、高学年になって同じ話をすると、「大企業の部長になりたい」と言う子どもが少なからずいた。私が小学校に入学した年が高度成長期の始まりで、6年生になると高度成長がかなり展開していたので、そういう時代の影響があった。一方で、今の若者には違う景色が見えていると思う。

島田　金は社会分業を実現する手段だ。海幸彦・山幸彦の話のように、それぞれが得意分野に特化できるためにあったが、それが進化し大規模化・複雑化する過程で社会を支配する手段にもなってきた。そうした支配の仕組みの下では幸福が得られないと感じている若者が増えてきているということだろう。私が若いころは、それは「革命」と言う言葉に結び付いた。

人にもそのための文化と道徳があった。一方、お金さえあれば誰かに面倒を見てもらえると期待するのが今の社会で、この仕組みの脆さと冷たさに不安を感じるのは当然だ。この不安の引き金を引いたのは、就職氷河期とデフレだろう。大学を出ても正社員になれない人が100万人以上発生した。ベースアップがなく、10年20年たっても地位も年収もさして上がらないことが珍しくなくなった。

島田　先行きが不透明な世の中で、今の人々が「お金を稼いで何の意味があるんだ」と感じるのも道理にかなう。

内山　日本人が、自分の人生の行く先が「見える」と思うようになったのは近代になってからだ。前近代の人々は、乳幼児死亡率が高いうえ、天然痘や肺結核など感染症で若くして亡くなることもあり、何が起こるか分からない世界のなかで生きていた。さらに、高度成長期に入って、われわれは例えば名だたる電機メーカーに勤めていれば安泰だと考えるようになった。ところが、気が付いたら日本の電機メーカーはほとんど全滅に近く、今の大企業も20年後にはどうなるか分からないという時代になってきた。今、われわれは再び「見えない」世界に突き当たっているが、近代のなかでもこの60～70年間の「見える」世界に生きている感覚の方が特殊だったということだ。

岸本　内山さんは日本人の宗教的意識、集落に住む人々が神仏をどう信じてどう暮らしてきたかを過去にさかのぼって研究されている。日本人は今でも初詣に行くし墓参りに行くが、何に手を合わせているのか。

島田　今は新興宗教も、「見える」世界に生きる人たち向けに「あなたの背後霊が災いしている」「このツボを買えば幸せになれる」と語りかける。今の日本人は、「見えない」ものを「見えない」まま受け取れなくなっている。

内山　日本人の宗教観の根っこにあるのは自然信仰だ。自然信仰がいつごろ発生したのかは調べようもないが、時代によって少しずつ内容を変えてきた。特に3～7世紀、多くの渡来人が日本にやってきた時代に、朝鮮・中国から仏教、道教、儒教、その3つのいずれにも属さない土着的な信仰などが伝わってくるなかで、解釈が変わってきたと見られている。7世紀には、自然自体というより、変わっていく自然を作り出している「見えない」世界が信仰され始めた。そこでは、例えば太陽が出て大地があって鳥が木の実を食べて……という自然同士の関係を「自然（じねん）」と解釈するようになった。「じねん」とは、「自ずから然らしむ」、作為的なものが何もないあるがままの状態のことだ。この見方はやはり大陸から入ってきた仏教の影響が大きい。民衆仏教は鎌倉時代に興ったというのが教科書的な見方だが、古くから民衆の間では自然信仰と仏教が融合したものが信仰されて国家仏教と対立していたと言える。

岸本　聖書やコーランは文字で説き、「善いことをすれば天国に行く。悪いことをすると地獄に行く」というような論理的命題を信じる集団を育てる。一方、日本の信仰は、自然に抱かれているという感覚を持つ集団を育ててきた。私の提唱する「他己社会」、他人と自分の価値の等しさを認め世の中のために生きることに価値を置く社会につながる信仰だと感じる。

内山　民衆的な仏教の世界が広がりとして象徴的なのは、7世紀の修験道の発生だ。修験道は自然信仰と初期密教などが融合したようなもので、修験者は山で修業しながら雨ごい・雨止めや薬草や気功による病気治癒を行った。この背景には、律令制ができて土地も人も国家のものとされ、税を納めなくてはならなくなったことがある。御上に不満を持って山に向かった修験者は、雨ごいや病気治癒などを通して人々から「あの人は立派な人だ」と認められ、民間のお坊さんの役目を果たしていた。

お金による可視化とお金からの独立

島田　当時政府に不満を持った人々も、なんとかなりそうな可能性のある場所に移動していたのか。近代以前は自然が人間社会よりもはるかに強大で、その自然を作る「見えない」関係を信じていたから、将来が「見えない」状況を普通に受け入れることができたということではないか。これに対し、現代の日本人は戦後に経済が豊かになったこともあり「見える」ものだけに寄りかかっている。

内山　現代において「見える」世界を絶対化するのはお金だ。例えば岸本さんと私が2人で同じバイトをして、岸本さんが1万円、私が9999円の日当をもらうとする。どう見ても同じようなものだが、「なぜ同じことをやって岸本の方が1円多いんだ」と、この1円の違いが大いに気になるわけだ。それほどはっきり「見え」てしまう。また、私は上野村で裏山を持っていて、裏山の木を切って風呂の薪にしているが、この作業は結構時間を食う。「この時間で仕事して原稿料などで薪を買ってくる方が合理的ではないか」と思うこともあるが、そこにはやはりお金には換算できない価値がある。近年は、すべてのものをお金で可視化してしまう社会のつまらなさに皆が気付いてきた。この世界で生きている以上、お金をある程度持って使わざるを得ないことは確かだが、お金に従属したくないという人がたくさん出てきているのではないか。

維持できなくなってきた軍隊型の組織構

内山　確かに今の若者はそういった社会の仕組みをよく見ている。大きな組織のなかに入らないとどうしてもできない仕事もあるだろうが、大きな組織に入ると特有の問題が必ず発生して人間を蝕む。そういう嫌な空気が世界を覆っている実感を持っていると思う。

岸本　大きな組織では、指導する立場と指導される立場が生じざるを得ない。軍隊のようなタテ型組織だ。お金をもらってもそういう組織では働きたくないと言える世の中になった。インターネットのおかげで働き方が多様化したからだ。働く時間の大半を決まった人の下で命令されて過ごすのは居心地が良くない。気心の通じた仲間とフラットに働く方法があることが知られるようになり、現に増えている。

内山　近代の色々な組織の構造は軍隊を模倣して作られてきた。常に目下の人間が目上の人間に従うという軍隊型の組織構造は、産業革命のころに工場に入り込み、たくさんの人が命令通り動くという仕事の形ができ上がった。教育にしても、文科省、教育委員会、校長、教師……というピラミッドがあって、その下で生徒が学ばされてきた。そのような近代の仕組みのすべてが通用しなくなってきている。

岸本　人海戦術で全員が同じ作業する「工場」という装置は、自動化のおかげで大半がなくなった。オフィスの仕事もコンピュータのおかげで多様化した。決められたことを素早くする時代から、何をすべきか考えてやってみる時代に転換した。

内山　もちろん言われた仕事だけをこなすという働き方がまったくなくなったわけではないだろう。例えば、大型飲食チェーンではどこの店舗でも同じレシピで提供することになっているだろう。一方で、ある中華料理チェーンは、餃子のレシピは共通だが、各店舗の店長が独自メニューを開発することが認められており、そこに客が付いてきている。ミクロではそのような現象も見られ、ある意味で二極化してきているが、まだこれまでと異なる組織のあり方を組み込んだ資本主義はできていない。特に日本の場合、明確な階級社会である欧米と異なる社会風土の下で、どのように仕組みを作るのかという課題もある。その意味では、今が端境期なのだと思う。

「大文字の革命」から「小文字の革命」へ

島田　新しい組織や社会のあり方が求められているようだ。

岸本　日本の人口ピラミッドがつぼ型に変化したことは悪いことではない。上司の言うことを辛抱強く聞かなければ昇進できないということもなく、やりたいように生きやすい世の中になった。常識を疑いなんとかしてやっていく醍醐味を味わいやすい時代だと思う。高齢者数のピークを迎える45年以降の日本の将来は、本当に楽しみだ。私が「ホモデウスと日本」の連載において「これからの日本人はどう生きていくのか」というテーマを書く根底にあるのはこの認識だ。

内山　今新しい考え方を組み込んで自分たちの仕事の作るというと、比較的小さい組織になってくる。規模としては従業員300人ぐらいまでが皆で協力して取り組みやすいだろう。300人を超えると管理部門が必要になり、管理する人と管理される人がどうしても分離し、皆で取り組むという形から離れる。年賀状をもらっても、300人ぐらいが個人を識別できる限界ではないか。ただ、大きい組織でやりようがないとは思っていない。どうしたら大きい組織のなかで何かを分散させ、小さな事業体の連合体みたいなものを作っていけるかということがこれからの課題になると思う。

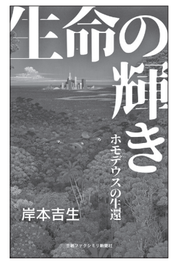
岸本　確かに、製造業などの中小企業は従業員数300人以下が原則だ。内山さんはかつて上野村で「新たな多数派の形成をめざすシンポジウム」を行われた。世間常識と違う価値を大切にして生きている「少数派」が集まり、都市でお金を稼いで働くことが当然の社会を問い直すイベントだった。社会はその後その方向に変化しているだろうか。

島田　お金とは別の分業の手段として、SNSや暗号資産が発達してきた。SNSはお金をやりとりする価値を決める情報を、国や大規模な組織の意図から離れて得ることができる。また、暗号資産も、国の後ろ盾がなくお金とほぼ同様の機能を持つ手段として発達してきた。ともにこれまで作られてきた支配の仕組みから抜け出せる手段であり、かつ小規模な組織でも展開が可能だ。

内山　社会に問題意識を持つ時、かつては「大文字の革命」で社会をすべて変えようとする考え方が普通だった。社会主義思想がその代表だ。それがこの半世紀の間に「小文字の革命」に変わってきた。新しいコミュニティーを作ったり、本当の意味での「ベンチャー企業」を興したり、自然とともに生きるために田舎に引っ越したり、社会全体から見ると目立たないが、それぞれがそれぞれの場所で違うものを作るという動きが少しずつ加速している。今、実はそれが相当のうねりになってきているのではないか。「小文字の革命」が連鎖して大きく社会を変えていくという新しい時代がもう始まっていると感じる。

16

連載「ホモデウスと日本」が書籍化されました



生命の輝き　ホモデウスの生還

著者：岸本吉生
発行：金融ファクシミリ新聞社
定価：990円（税込）

内山節（うちやま・たかし）1～2ページ記事参照

岸本吉生（きしもと・よしお）デザインコンサルタント。輪島塗、播州織など自然、文化、価値創造に貢献する仕事を応援。金融ファクシミリ新聞に「ホモデウスと日本」を連載し『生命の輝き ホモデウスの生還』として出版。公立の小中高校にて動かない希望の星を見つけるキャリア教育の講師を務める。その発表の場「常若甲子園2025」を主宰。通商産業省入省後、環境経済室長、経営支援課長、愛媛県警察本部長、九州経済産業局長を経て退官。神戸市出身。63歳。

島田一（しまだ・はじめ）人は使命を持って生まれ落ちその使命を果たす過程で様々なことを学ぶ。悟りを開いて次の使命を果たすために死ぬ。私の使命は素直な目で見て考え発言し報道すること。創刊して37年、広告宣伝を頂かず記者クラブに属さない独立独歩の金融新聞を発行し続ける。特定の宗教に属さずに日本の社会と文化、宗教や心のあり方を模索。趣味は身体を鍛えること、音楽鑑賞、茶道表千家、絵画等の収集。横浜市出身。72歳。

大谿山豪徳寺 第三十六世大道徹哉師晋山式

令和七年五月二十五日・二十六日の両日にわたり、大谿山豪徳寺において、第三十六世大道徹哉師の晋山式が厳粛に執り行われました。

第一日〈令和七年五月二十五日〉

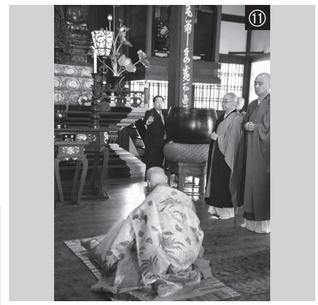
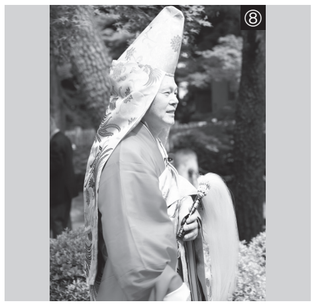
晋山式の開催にあたり、西堂老師が豪徳寺山門に御到着され、山内一同お迎え申し上げました。続いて首座入寺式が執り行われ、新住職を補佐する首座和尚が正式に入寺され、その重責を担うことを表明されました。その後、後堂老師の御導師のもと、開山歴住報恩法要が営まれました。豪徳寺開山以来の歴代住職への感謝と、その法灯を受け継ぐ決意を新たにする厳粛な時間となりました。第一日の締めくくりとして本則行茶が開かれました。

①② 晋山式を待つ豪徳寺境内／③ 西堂（盛田正孝）老師豪徳寺にご到着 ／④ 首座入寺式（新命大道徹哉師）／⑤ 盛田正孝老師西堂位に ／⑥ 本則行茶中配役宣読と西堂老師の本則提唱

第二日〈令和七年五月二十六日〉

晋山式が挙行され、第三十六世大道徹哉師が正式に山門をくぐり、豪徳寺住職としての第一歩を踏み出されました。法堂において晋山開堂が行われ、新住職による最初の説法がなされました。最後に首座法戦式が執り行われ、禅問答による法戦を通じて仏法の真髄が示され、晋山式は円成をもって終了いたしました。

16

⑦ お稚児さん行列 ／ ⑧ 晋山行列の新命大道徹哉師 ／⑨ お稚児さんと記念写真 ／⑩ 山門法語 ／⑪ 仏殿に礼拝 ／⑫ 辞令伝達 ／⑬ 晋山開堂 ／⑭ 問答 ／⑮ 首座法戦式（拈竹筵）を渡す ／⑯ この後、両班、後堂、西堂老師に礼拝 ／⑰ 晋山式記念撮影

曹洞宗総合研究センター「Shojin-Project」インタビュー

多様化する価値観の中で学ぶ 若手僧侶の活動と仏教への想い

曹洞宗の若手僧侶が中心となり、現代のライフスタイルに合わせた新しい布教の形を模索する「Shojin-Project」。このグループは、曹洞宗総合研究センター「教化研修部門」にて運営されており、仏教を現代社会に広めるための活動を行っています。本記事では、彼らが手掛けるイベント「東京禅僧茶房」の模様、そして若手僧侶たちがそれぞれの視点から語る現代社会への問題意識や、仏教を通じて社会に貢献したいという彼らの想いについてご紹介します。

Shojin-Projectは研修の場でもある

▼まず、Shojin-Project主催のイベントについてお聞かせください。

渡部　私たちは曹洞宗総合研究センター「教化研修部門」に所属しており、現代における布教教化の可能性を模索することを目的として研修を受けております。在籍しているのは20代から30代のいわゆる若手僧侶で、現在は研修生が10人で全員が「Shojin-Project」に関わっているメンバーです。

普段は大学等の先生による講義や、さまざまな業界の方々との交流を通じて研鑽を積んでおります。「Shojin-Project」は、若手僧侶の感性を生かし、現代のライフスタイルに合った新しい布教の形を考えるという実習の一環です。

主な活動としては、3つの柱があります。毎年、曹洞宗の寺院が運営する幼稚園等を訪問し、仏教をテーマにした劇を披露すること。駒澤大学の坐禅堂をお借りして月1回または2回ペースで行っている坐禅会。そして、「東京禅僧茶房」です。

これは都内のイベントスペース、お寺、カフェなどを数日間貸し切り、普段お寺と接点のない方々に仏教に触れていただく機会を提供する催しです。「東京禅僧茶房」では、カフェやワークショップ、展示、僧侶との対話スペース、坐禅体験など、気軽に立ち寄れるような内容を提供し、お寺に興味はあるけれど、実際に足を運ぶには勇気がいるという方を対象とした「お試しイベント」となっております。

特にカフェなどは気軽に立ち寄れるように、ワークショップや展示は、お寺に関心のある層や、そうした活動に興味がある層にとって親和性の高いものを選び、仏教へのハードルを下げ、まず来場していただくことを目的としております。

今年のテーマは「愛語」です。「愛語」は曹洞宗の典籍『正法眼蔵』に出てくる言葉です。このイベントもそうですが、研修全体を通して、一人ひとりが自分なりに「愛語」と向き合い、それを表現し、来場者の方々に伝えております。

具体的には、今年のワークショップでは「消しゴムはんこ」作りを行いました。

諏訪　「東京禅僧茶房2025」における「消しゴムはんこ」作りのワークショップで、題材となったモチーフはダルマさんです。今回はダルマさんという仏教にも関わりのあるデザインを通じて「愛語」を表現していただきました。消しゴムはんこを彫る作業は、他のことを忘れ、ただ彫ることに集中できるため、目の前のことに集中するという仏道修行に通じるものがあると考えております。器用な方も不器用な方もいらっしゃると思いますが、どんな仕上がりでもそれはその方の味になると思います。ワークショップでは私たちがサポートいたしました。

▼「東京禅僧茶房2025」では、このはんこ作りのコーナーのほか、カフェスペースがありましたね。ここでもお坊さんとお話しできるのですか。

渡部　はい。お話しできる僧侶がおります。また坐禅体験もできます。新宿区の四谷にある東長寺さんの施設をお借りしております。東長寺さんでも定期的にカフェを開催したり、イベントスペースとして利用されているそうです。研修の目的として、イベントでの布教活動もそうですが、全国の寺院から集まっている研修生が、任期が終わった後に自分のお寺に帰った際に、ここで得たイベントの経験を生かしてほしいという意図もございます。一人ひとりが専門的な知識やスキルを持ち寄り、協力して一つのイベントを作り上げ、それをお寺に持ち帰って生かすことができる研修となっております。

左 消しゴムはんこの見本／右上 イベント前の入念な打ち合わせ／右下 カフェコーナーでは自らお茶をいれる

いま、若手僧侶が考えていることは？

▼みなさん、日々の活動の中で最近特に気になっていることはありますか。

諏訪　世の中には、ある人から見れば「それって本当にやる必要があるのか」と思われるような、いわゆる無駄に見える部分がたくさんあるかもしれません。しかし、そういった「無駄」という概念自体が、人間のエゴというか、自分中心的な視点で物事を見たときの考え方になってしまっているのではないでしょうか。

今の社会は、無駄を排除し、徹底的に効率化していく時代です。コスパ、タイパといった言葉が流行していますが、果たしてそういう時代が今後も続いていくのでしょうか。

将来、お寺に戻ったら、檀家さんと関わり、みなさまとさまざまなお話をするといったことも、コスパやタイパなど、損得で図れる行為ではありません。そういう時間をみなさまと作っていきたいと思っています。

「東京禅僧茶房2025」の坐禅体験

私は、無駄な時間こそ、いま必要なのではないかと考えています。結局、それが「無駄」だというのは自分の見方に過ぎません。無駄だと思ったことが、いろいろな次の展開につながることもあるのです。

そういった意識を改めていきたいです。今回のイベントで過ごした時間も、そのような大切な時間の一つだと思います。

押見　私が注目しているのは「反出生主義」という思想です。これは「人は生まれてくるべきではない、子どもを作るべきではない」という考え方です。

人間は普通に生活していても、苦しみを感じることがあります。そうした中で「自分は生まれなければよかった」と考えてしまう、そういう考え方がいま、SNSで盛り上がりを見せているんですね。

この考えを追求していくと「なぜ自分は生きているのだろう」「なぜ自分は死ぬのだろう」という、本当に宗教の根本的なところに、たどり着きます。そうした考察を、研修や檀家さんとの関わりを通じて、もっと深めていきたいと思っています。

若い人が「生まれてこなければよかった」と口にすることに対して、どう向き合うべきでしょうか。「そんなことないよ、良いところもあるよ」と否定したいところです。でも、その人が本当に、実際に感じている「生まれてこなければよかった」という心をしっかりと受け止める必要があると思います。

受け止めた上で、「仏様はこう説いているんだよ」ということを伝えていきたい。「なぜ人は生きているのか」「なぜ人は死ぬのか」など、相手の感情や意見を肯定しながら、仏様の教えを伝えていく。そういうアプローチで、社会のトレンドに対して、少しでもみなさんに寄り添っていきたいと思います。

天野　現代社会の孤立化について考えております。世の中には無縁化社会が広がっており、やはり人とのつながりが、どうしても薄まってきているのを感じています。

私は福島の田舎の方の生まれで、結構、近所付き合いなどもあったのですが、都市部に引っ越してくると、隣の部屋に誰が住んでいるかも分からないという状況です。

田舎に住んでいた時には気づかなかった違和感というものがありました。そういうところからも孤立が現実化しているなと感じています。

この孤立化は深刻な問題です。やはり人とのつながりの大切さ、そのつながりという、今後、人が支え合っていく中で、とても大切なことなのです。

このような社会の中、私は寺院としてできることがあると考えています。

檀家さんだけでなく、地域社会ともっとつながりたいです。どうしてもお寺というと、敷居が高いイメージを持たれている方もいらっしゃるかもしれませんが、今回のイベントなどを通じて、お坊さんと出会いを持って、その敷居を下げてもらったり、お寺に来てもらって、悩みごとや相談ごとを打ち明けてもらえるような関係を築きたいと考えています。

▼仏教界の課題について、みなさんで話し合われる機会もありますか。

渡部　例えば、僧侶のなり手が少なくなって人材不足であったり、お寺に戻った際のマンパワーが不足しているという人材的な問題があります。また、教育システムとして、昔は駒澤大学で勉強して僧侶になるという方が多かったのですが、今はそれだけでなく、様々なキャリアが多様化しております。

実際に曹洞宗総合研究センターに来て強く感じたことですが、専門的な勉強をするためには、ある程度の専門的な環境が必要だと思います。例えば、仏教書を1冊買うにしても、一般の人が手に取りにくいものもたくさんあります。また、駒澤大学の先生方から授業を受けたり、さまざまな立場の方と出会うことで、多様なお話を伺う機会がありま す。そういった環境がまず整わないと、若手が育っていかないと感じました。

お坊さんが漠然と家を継ぐために修行に行き、そのままお寺に戻って活動するとなると、おそらく迷ってしまうと思います。「自分はこれからどうしていこう」と考えることが多すぎる割に、それを教えてくれる人がいないですし、今、価値観が非常に多様化しております。何か良いと思って勉強しに行っても、実際に自分が考えていることと違ったりすることもあるかもしれません。

そのような意味で、この教育研修機関、曹洞宗が行っているこの事業には非常に大きな意味があると思っております。学びたいという意欲のある方がここに来れば、自分なりの答えを導き出し、必要な情報をきちんと得て、実際に自分で実践できるところまでスキルを高めていくことができます。ここが非常に意義のあることであり、このような場所がこれからも続いてほしいと願っております。

曹洞宗総合研究センター教化研修部門研修生のみなさん。左より諏訪弘史氏、押見大俊氏、天野宏淳氏

インタビュアー・塚越雅之

編集後記

藤木隆宣

私の本務地・東京都世田谷区北沢永正寺では二〇二三年四月から「永正寺こども・おとな食堂」を立ち上げて今に至っています。開催日は毎月最終土曜日11時から14時です。七月は夏休みバージョンで時間を17時から19時までにしました。メニューは世田谷区社協から頂いたカレーライス、三浦スイカ、野菜サラダでした。いつも8人位の方がボランテアで活動して下さりお陰様で何とか運営が成り立っています。久しぶりに寺族の宏照と二人で紙芝居と絵本の読み聞かせをしました。紙芝居は「アンパンマンとかいじゅうアンコラ」、読み聞かせは「こすずめのぼうけん」です。

駒大児童教育部の夏の巡回を思い出しました。私が巡回したのは東北表班、南九州でした。約六十年前のことですがお世話になったご寺院や重いバッグを背負いながらの巡回は今でも懐かしい思い出がいっぱいです。その児教がサークル活動としてなくなって久しいのですが、巡回では昼間は保育園、幼稚園、小、中学校に夜は盆踊りやフォークダンスの指導に地域の婦人会や青年会に教えて回りました。全国を12班4人で一か月間全国を飛び回っていたのです。

＊　＊　＊

さて、話題は変わりますが私は福井県生まれですから保守思考が基本的に根づいています。

参議院選挙の結果から感じる事は長く政権を握っているといつの間にか自分たちファーストの世界になってしまい、他から見たら問題の案件が見えない集団になってしまう恐ろしさです。私自身も埋没している自分があります。私が身を置くお寺の世界も同様で自分たちファーストの世界に生きていることに驚いています。このままではせっかくの祖師方の願いが外に置かれて動いている事になります。このようなときになぜか私は明治時代の廃仏毀釈運動が思い出されます。近い将来に「第二の廃仏毀釈運動」が起きないとは言えません。

例えば昔は各地に寺子屋がありその活動は少なからず人間の成長に寄与してきました。

今でも混迷する世界を救う道として仏教に期待するところは大きなものがあります。ではお寺（教団）は今何をすべきかを真剣に考えてみたいものです。

駒沢大学名誉教授であられた故佐々木宏幹先生がよく言っておられたのは「生活仏教」です。現在のお寺の活動の中心である法事、葬儀から生活仏教が生まれるかが問われています。現代は葬儀、法事は昔ほどではなくても日常的にありますが、しかし人としての精神を支える生活仏教になっているかと考えた時に、村社会が大きな存在の時期はお寺の存在が生活仏教になっていましたが、人々の生活がグローバルになった今はそうはなっていないのではと考えます。

習慣的になっている仏事を人間生活に必要不可欠のものに引き上げないと私たちが基盤としている土台が途端に怪しい、頼りにならない存在の上にいることになります。

私は佐々木宏幹先生のご遺骨をお預かりしています。先生もお入り頂く納骨堂を建設すべく計画も進めています。二〇二六年二月二十六日には先生の三回忌法要を東京グランドホテルで予定しています。

先生の最後のご著書『宗教人類学の地平』『仏教人類学の諸相』は弊社から発刊されていますが、先生の追悼集『民俗宗教と仏教文化――佐々木宏幹先生追悼集』は島薗進先生、佐藤憲昭先生、高見寛孝先生の御尽力で三回忌法要までに発刊が間に合うよう準備を進めております。なお、この追悼集の序文は山折哲雄先生、論文23人、追悼文18人が掲載されます。この中から大きなヒントが生まれることを期待しています。発刊しましたら是非既刊本と合わせてご購入のほどをよろしくお願い申し上げます。

藤木隆宣九拝

一仏両祖の教えを今に伝える

曹洞禅グラフ

2026 冬 正月号－175

特集

INTERVIEW

駒澤大学 村松哲文 新学長

これからの仏教と大学

インタビュアー◉古瀬ワークショップデザイン事務所 代表 古瀬正也

2025年10月30日　刊行

〈児童養護施設〉手まり学園

寄附者御芳名（敬称略）

令和7年5月22日～7月13日

所在地	寺院名／個人名（回数）	金額
秋田県	円通寺	10,000
静岡県	甘露寺	10,000
神奈川県	青木義次（139）	5,000
長崎県	南明寺	10,000
神奈川県	青木義次（140）	5,000
東京都	篠原東一	10,000
	合計額	50,000

ご支援をいただき
誠にありがとうございます

仏教企画発行の刊行物

『修証義』解説	●丸山劫外＝著	1,400円★
まんが問答一期一話	●平和宏昭＝文／垣内敬遠＝まんが	1,200円★
葬送のしおり	●長井龍道＝著	30円
〈修証義読本〉生老病死	●須田道輝＝著	500円★
曹洞宗檀信徒経典	●須田道輝＝解説	300円★
〈曹洞宗檀信徒必読〉供養のすべて	●霊元丈法＝著	140円★
〈曹洞宗檀信徒必読〉葬儀のすべて	●霊元丈法＝著	150円★
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って		500円
観音の咒 大悲心陀羅尼	●渡辺章悟＝著	500円
宗教人類学の地平	●佐々木宏幹＝著	2,300円
仏教人類学の諸相	●佐々木宏幹＝著	2,300円

※ 価格はすべて税別価格です。（★印のものは部数により割引があります）
※『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。
同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

季刊誌 曹洞禅グラフ

【発行日／年4回】

彼岸－春号	2月10日
お盆－夏号	5月30日
彼岸－秋号	8月20日
正月－冬号	10月30日

【定価：200円／1部】

～9部	200円
10～ 19部	150円に割引
20～ 49部	135円に割引
50～ 99部	130円に割引
100～199部	120円に割引
200～299部	110円に割引
300～499部	100円に割引
500部～	90円に割引

お申し込み
有限会社 仏教企画
〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5
Tel: 042-703-8641　Fax: 042-782-5117　Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号 でも可能です。